

田辺聖子〈知の履歴〉へのアプローチ：『田辺聖子十八歳の日の記録』を起点として

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 公開日: 2024-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白川, 哲郎 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/2000120 |

田辺聖子〈知の履歴〉へのアプローチ

—『田辺聖子 十八歳の日の記録』を起点として—

白川哲郎

はじめに

田辺聖子氏の一九四五年四月から一九四七年三月までの日記が再発見されたは、二〇二一年六月のことであった。^①「田辺聖子」という「戦後」日本を代表する作家の若き日、十八歳頃の日記が再発見、公表されたことは多くの人びとの注目を集めた。^②

その背景には、この日記が日本の近現代史上画期となる「昭和二年八月十五日」をはさむ時期の記事を含んでいることがあった。○当時、女子の高等教育機関・女子専門学校―具体的には本学（大阪樟蔭女子大学）の前身である樟蔭女子専門学校（以下、「樟蔭女専」と略記する）の生徒であった田辺氏が、敗戦の日八月十五日をどのように迎えたのか、それに前後する時期をどのように生きていたのかを検討することは、何よりもまず田辺文学を研究していく上で大きな意味を有する。同時に、後に著名な作家となる人物が、十八歳

の頃、太平洋戦争中、そして戦後すぐの社会をどのように見ていたのかを知る上で貴重な歴史史料でもある。そして本学にとっては、その頃樟蔭女専において、如何なる教育が行われていたのか、女生徒たちはどのような学校生活を送っていたのかを知る上で、極めて重要な「学園資料（史料）」となる。^③

田辺氏の日記が有する、こうした資・史料としての価値を前提に、この日記を読み解き、当時の樟蔭女専における教育や学校生活の実態について明らかにしていきたいと思う。そしてそれを通して、昭和初期のいわゆる「女学生」^④の学びの過程、〈知〉の蓄積過程について明らかにしていきたい。^⑤

なお、田辺氏の日記のテキストとしては、二〇二一年十二月に文藝春秋より刊行された『田辺聖子 十八歳の日の記録』^⑥を用い、同書を『日記』と略記する。以下、本文中で田辺氏の『日記』について指摘、あるいはその記事を引用する際の年月日記載は、『日記』との参照の便を図るため、年号（昭和）を使用して表記すること

とする。また、以下、田辺氏に対する敬称も略させていただくことにする。

一 樟蔭女専における田辺聖子の学校生活

『日記』の解説で梯久美子氏は、「われら御楯」の中で田辺が記述する昭和二〇年六月一日大阪大空襲における経験が、この『日記』に沿った記述になっていると指摘している。そして田辺が「未曾有の震災の日起こったことをなるべく正確に書く」としており、そのために日記を参照したことがわかる」とする。さらに「ほかの作品でも、叙述に多少のバリエーションはあるが、あの日見た事実を変えている部分はなく、重要な場面では、そのまま日記の表現を使っている。それは後年になっても変わることがなく、作家の目で事実を加工することをやっていない」と述べる。

とするならば、田辺が自伝的作品やエッセイの中でこの時期のエピソードを取り上げようとする場合、梯氏が二つの山場とする①大阪大空襲の記事と②敗戦の日八月十五日の記事以外についても、当然、この『日記』の記事を参照したと考えられる。六月一日の大空襲により、この『日記』以前の日記と想像される「美しいノート」を焼失していること、また、「われら御楯」の中で「子供のじぶんの日記も本もすっかり焼いてしまった。灰になったのを見てしまった」と記述していることから、田辺がこの『日記』以前の日記を焼失してしまっていると推定できる以上、『日記』記事の参照度合い

はさらに高いものとなろう。同時にそれは、田辺文学におけるこの『日記』の重要性を意味する。

ここでまず、『日記』の記事と田辺の自伝的作品群における記述とを比較することで、樟蔭女専における田辺の学びと学校生活の一端を明らかにすることから始めたい。

(一) 戦時下における学びへの期待と諦め

敗戦直前のエピソードとなるが、『欲しがりません勝つまでは』の中で、母親が「通知簿はどないなったんや、(一年生…筆者注)三学期の」と問うたのに対して、田辺は「そんなもん、考えてられへん。通知簿なんか、どないなってもええわ」と答える。母親はそれに「学生やから通知簿あるの、当り前やないかいな。月謝ばっかり払わせて工員のまねさせて、学校も文部省も、なに考えてはんねん」と切り返す。そして、「未曾有の国難やからしようないやろ」と言う田辺に、「学生の勉強に関係あらへん」と一蹴する。

ところで、これとほぼ同様のやりとりが、「われら御楯」の中でも描かれている。ここでは、地の文を省いて会話のみ追ってみよう。

(母親)「今年の通知簿はどうなるの」

(主人公)「そんなこと考えてられへん」

(母親)「なんで」

(主人公)「通知簿どころやあらへん。こんな時節にそれどころやないわ」

(母親)「そう棄鉢にならんでもええやないの」

(主人公)「昔とちがうのよ、今の時代はもう……」

(母親)「そうかて学生やもの。勉強せな、あきますかいな」

「何のために学校へ月謝おさめてるねんな。女工ばかりさせるのやったら、学校で月謝とるはずないがな。阿呆らしい」

(主人公)「でも今はちがうのよ、今の時代は」

(母親)「何が違うねんな」「学生いうもんは、どんな時代でも勉強せな、あきませんがな。そうでないと、次の時代で穴があいてしまうがな」

細かな叙述の違いはあるが、「われら御楯」と『欲しがりません勝つまでは』の筋立ては同じである。

そしてこれらの叙述は、『日記』昭和二〇年五月三十一日条の記事が基になっている。『日記』中、会話文として記されたもののみ追ってみる。

(母親)「通知簿はどうなったの」

(田辺)「もう、通知簿なんかどうでもいいわ。こんな時節にそれどころやない」

(母親)「そう、捨て鉢にならんでもええやないか」

(田辺)「今、そんなことを考えてられへん」

(母親)「そんなこと言うては上の学校受けられへんやろう。働く働くでそんなに働きたかったら、学校やめてどこかへ働きに行ったらええやないか。つかかるように、ものを言うて、ほんとに可愛げのない子や」

「だいたい、うちで学校へあげるような事は出来へんのやけど、まあまあとおもってやっと専門へ上げてのに。何や、そのいい方は。そんなに仕事したかったら、もうどこかへ勤めたらええやないか」「高い月謝払うて、なんのために学校へ行かしてるのや。学校へやってる以上、通知簿のことは気にするやないか。聖子はほんとに可愛げがない。親の手伝いもろくにせず遊ばしてるくせに、なにをえらそうにへりくつを並べるのや」

最後の母親の発言を除けば―そして、この部分の叙述の違いが、「われら御楯」と『欲しがりません勝つまでは』との違いではあるが―、「われら御楯」の叙述も『欲しがりません勝つまでは』の叙述も、エピソード自体の流れは『日記』そのままである。そして一見する限り、「われら御楯」の方がより『日記』の内容に沿った書き方になっている。

田辺と母親との会話からは、一方で戦時下ではあるが女子の高等教育機関である女子専門学校に娘を進学させた、学ばせてやりたいとの親の思いを読み取ることができよう。そして他方では、田辺ら女生徒たちの、より高度な学びを期待して高等教育機関に入学しながら現実には学問に触れることが難しく、戦争遂行の一端を担うべく勤労働員されたことへの諦めと戦勝のために「尽忠報国」を貫かなければならないと考える若者ならではの使命感との交錯を読み取るべきなのかもしれない。

太平洋戦争末期の一九四五年始めから、樟蔭女専では、田辺ら一年生のほとんどが郡是塚口工場へ勤労働員されていた。『日記』は冒頭からしばらく、その郡是塚口工場における勤労働員に関わる記録となっている。工場の寮でのクラスメートとのやりとり―全てが友好的なものではないが―や、工場的女子従業員に向ける女専生たちの偏見をも含むまざしは、軍需工場における勤労働員の実態について考える際、参照されるべきものであろう。

(2) 戦後における学校生活の一端

『欲しがりません勝つまでは』には、田辺が第二次世界大戦終結直後の食糧難を詠んだ和歌が三首引用されている。

戦時中よりひどい食糧難になった。

「一握の米の尊し五人の命これにて幾日か過ぎん

金色に光れる芋の熱かるを口にふくめば涙しこぼる

漱石も源氏・枕もなにかせんただ一碗の粥の尊さ」

などと私はうたを日記に書いている。

この三首が、『日記』昭和二〇年十月十四日条に「うた日記 食糧難をうたう。呵々。」と書き始めて書き付けられた十三首のうち、一番と三番、そして五番の歌であることは一目瞭然である。大阪における当時の食糧難を改めて確認することができる一方で、こうした和歌を難なく詠める樟蔭女専時代の田辺の創作能力の高さを再認識させられる。

さて、ここで注目したいのは、「漱石も 源氏・枕も なにかせ

ん ただ一碗の 粥の尊さ」の一首である。「漱石」は夏目漱石のことで、田辺自身が「漱石」というのは、ちょうど漱石についての講義があったからである。」と記す。この点から、敗戦直後約二か月経つか経たないかの時期、樟蔭女専で再開された授業において、夏目漱石が講義されていたことが知られよう。

ところで、和歌中の「源氏」が「源氏物語」、「枕」が『枕草子』を意味することは容易に推定できる。もちろん田辺がこの時点までに『源氏物語』『枕草子』に触れていたことは疑いない。『源氏物語』や『枕草子』が日本の古典文学を代表する作品であり、それらの書名が想起させる内容が豊かなことから、和歌中のことばとして田辺がそれらを選んだことは何の不思議もない。

ただ、あえて樟蔭女専国文科における教育内容という点にこだわらなければ、一九二八年度国文科『教授要目』において、第二学年の国語について「本学年ニ於テハ中古文ヲ主トシ韻文ヲ併セ授クルモノトス」として、使用する教科書の中に『枕草子』と『源氏物語』があがっていることに注意したい。この和歌を詠んだ時、田辺は二年生である。戦中から戦後直ぐの時期に十分な授業が行われていたとは想像し難いが、戦中わずかに捻出された授業の際、あるいは敗戦後再開された授業において、『源氏物語』や『枕草子』が講義されていたのではないだろうか。そのことが戦後の食糧難の中で「一碗の粥」の貴重さを際立たせる比較対象として、「源氏」「枕」を選ばせる背景となつたと見なすことは牽強付会に過ぎるであろうか。もし、この推測が許されるならば、樟蔭女専国文科の国語教育にお

いては、開設時に計画された古典文学に関する講義が、以後一九四五年度まで継続して実施されていたことを示唆しよう。

いま一つ、「しんこ細工の猿や雉」⁽²⁷⁾の中の記述を取り上げよう。

「しんこ細工の猿や雉」の中に、安田章生先生に連れられて、藤沢桓夫氏宅を訪問したというエピソードが綴られている。それによると、卒業間近の一九四七年一月末、安田先生と校友会の委員とともに藤沢氏宅を訪れたという。客間の隣室に通され、先客（織田作之助の兄夫妻）があったため、二時半から一時間以上待たされ、ようやく四時過ぎに藤沢氏に面会することになった。田辺をはじめとする樟蔭女専生はほとんど何も話すことができなかったが、藤沢氏が「何か話して下さい。私は将棋さす」「大阪の女専や女学校の生徒さんは、なんにも話をしないね。尤も、あとでワルクチいうんやろうけど」「そうそう、名前おぼえとこう」「火曜にはあそびにいらっしやい。みんな来るから」と話しかけられたと記されている。また、「藤沢氏の指はじつに華奢で、ペンのほかに重いものを持ったことはないような、細長い、骨張った美しい指であった。その指先が駒をつまむ形がすっきりして、たいそう綺麗なので、あたまに残った」と、藤沢氏の指の記憶を叙述する。

これらの記述が、『日記』昭和二年一月二十八日条に基づくことは誰の目にも明らかである。その記事によれば、樟蔭女専の座談会への出席を依頼するため、安田先生と友人二人とともに四人で藤沢氏宅を訪ねている。織田作之助の兄夫妻が来訪していたため、二時半に着いたが四時過ぎまで待たされたとも記されている。そして、

藤沢氏から「何か話して下さい、私は将棋指す」「大阪の女専や女学校の生徒は何も話しをしないね。もっともあとで悪口言うんでしようが」「そうそう名前、おぼえとこう」といった発言があったこと、また「火曜には遊びにいらっしやい」と言われたことも記されている。さらに藤沢氏の指について「実に華奢で、ペンで立つ人らしく、細長い、骨立った美しい手であった」と記し、「指先で駒をつまむ時の格好」が「ちょっと忘れられないほど美しく脳裡に残った」と記録している。

「しんこ細工の猿や雉」の記述と『日記』の記事とを比べると、田辺が「しんこ細工の猿や雉」を執筆した際、『日記』を詳細に参照したことは間違いない。梯氏が指摘する通り、「叙述に多少のパリエーションはあるが、(中略)重要な場面では、そのまま日記の表現を使っている。それは後年になっても変わることがなく、作家の目で事実を加工することをやっていない」ことが判る。梯氏が山場と指摘する、歴史的かつ社会的な一つの重大事件だけでなく、日々の出来事を描く場合にもその指摘が該当することを改めて確認したい。

もちろん、田辺のその後の歩みを考慮するならば、藤沢氏宅訪問を単なる日々の出来事として片付けてしまう訳にはいかない。一九五六年に田辺が作品「虹」によって「大阪市民文芸賞」を受賞した際の選者の一人が藤沢桓夫氏であった。⁽²⁸⁾そして翌々年一九五八年、田辺の最初の出版書となった『花狩』の出版記念会の発起人の一人となってくれたのが藤沢氏であった。⁽²⁹⁾ある意味、田辺の作家として

力量を最初に見いだし、引き立ててくれた人物の一人が藤沢氏である。³⁶自身の歩みをふりかえる際、田辺がそうした藤沢氏とのファーストコンタクトを詳細に、またできるだけ正確に記しておこうとした、³⁷と推測することは許されよう。その際、「元ネタ」となったのが、『日記』であった。³⁸

改めて田辺らが藤沢氏宅を訪問したエピソードに戻ろう。『日記』によれば、藤沢氏を訪ねたのは樟蔭女専で開く座談会に出席を請うことが目的であった。『日記』昭和二十二年二月五日条によれば、田辺は「文芸委員」であった。また、「しんこ細工の猿や雉」には、「終戦後の学園は息をふき返したように活気をとり戻して、校友会のいろんな部が生まれていたが、生徒もまた、息をふき返したような子がたくさん出て来た」と記されている。そして、嫌々ながら「文芸部長にならされた」という。『日記』にも昭和二十二年五月になって、「いやいや皆から推された」田辺が校友会文芸班の班長となり、澁々懇談会を開いたと記す。³⁹

田辺らの藤沢氏訪問は、校友会文芸班の活動の一環であり、活発化する樟蔭女専生の活動の一つとして位置づけられよう。戦後、学校生活も平時に復帰して行く中で、樟蔭女専において生徒の活動が活発化していく様子を確認しておきたい。さらに言えば、そうした高等教育機関に在学する学生、生徒らによる文化的活動の活発化は、学校の枠を越えて広がっていたことが、『日記』に記された爐辺クラブの活動やそれに対する田辺の関心の寄せ方からうかがい知られる。

以上、『日記』の記事と自伝的作品群の中の記述とを比較することで、田辺の樟蔭女専時代の学校生活の一端を確認した。その作業を通して、当時の樟蔭女専における教育内容や在学生たちの学校生活、いくらかなりとも垣間見ることができたと考ええる。

二 田辺聖子〈知の履歴〉への接近

田辺は、「欲しがりません勝つまでは」「物書きは時代の証人」の中で、「それでも授業が再開したときは嬉しかった。本当に古典や漢文が面白くて、図書館の本を読んで、読んで。『自分の存在する場所はこちらかないわ』と思って、一所懸命、国文学を勉強しました」と記している。同様に『楽天少女通ります 私履歴書』「第三章 大阪弁でサガンを」の中で、敗戦により授業が再開となった「昭和二十年の秋の新学期から卒業までの一年半ほど、私は勉強したことはなかった」とも記す。⁴⁰

それらを踏まえて、改めて『日記』を樟蔭女専時代における田辺の〈学びの記録〉として読み解くことで、後に時代を代表する作家となった田辺の〈知〉がどのように形作られていったのか、言い換えるならば、樟蔭女専時代の田辺の〈知の履歴〉の一端、あるいはその軌跡をたどることができないのではないだろうか。そしてさらに、田辺の自伝的作品群における叙述から再現されるモノロogue的なそれと対照するならば、田辺の〈知の履歴〉とその背景がより鮮明に見えてくるように思われる。

(1) 『日記』に見える田辺の興味・関心

筆者の右に述べたような関心から、ここではまず、『日記』の中に登場してくる文学作品、映画・演劇、そして音楽などをピックアップし、整理してみた。それが「表1 田辺聖子『十八歳の日の記録』に見える文学作品・映画・演劇・音楽等一覧」である。

この表1からは、田辺自身が「何度読んでも飽きない」とする吉川英治『宮本武蔵』や、以前から田辺が深い関心を寄せていた菅原孝標女『更級日記』⁴¹が見いだせるのは順当なところであろう。『源氏物語』や『枕草子』、そして『古事記』や『日本書紀』が見いだせるのも同様と言えよう。

さて、表1で注目されるのは、敗戦前、勤労動員により郡是塚口工場に動員されていた時期、増田四郎『独逸中世史の研究』や石坂正蔵『敬語史論考』、栗原信一『明治開化史論』、渡辺滋『日本縫針考』、そして『日本の石仏』『日本の版画』といった書籍を購入していることである。これらはおそらく学校の授業とは直接関係が無く、田辺の幅広い興味・関心を示しているよう。さらに書名こそ不明であるが、中国を主に専門とした歴史地理学者藤田元春の著作に触れている点も併せて注目しておきたい。おそらく先の増田の著作と藤田の著作は、この時期の前後に田辺が執筆していた小説の参考とされたものと推定しておきたい。⁴²

さらに表1からは、一九四六年四月以降、田辺が外国映画をよく観ていると判断される。戦時中、上映が禁止されていたアメリカ映画が解禁されたのは、一九四六年二月のことである。四月以降公開

された『風雲のベンガル』『王国の鍵』などを、田辺は公開直後に観ている。樟蔭女専入学前から田辺は、父母や叔母に連れられて大阪ミナミの松竹座に映画を観に出かけていたという。⁴³戦時中は映画どころではなかったし、公開もされていなかった訳であるが、戦後になり映画、しかも外国映画が解禁されると、田辺はまた映画館に足を運ぶようになっていたことが確認されよう。「若い頃は映画に感溺した」⁴⁴と田辺は言う。そうした田辺の嗜好が現れ始めた時期として、樟蔭女専時代最後の一年を位置づけられよう。戦争という極めて大きな重圧が無くなった時、田辺の文化的生活はさらに豊かさを増し始めたのである。

(2) 『日記』から『欲しがりません勝つまでは』へ

次に、『日記』が記された時期の特徴を見いだすべく、それと重なりつつもそれよりも少し前の時期、すなわち田辺の高等女学校在学中が主たる対象となっている『欲しがりません勝つまでは』において確認できる、文学を中心とした映画・演劇・音楽などの作品の一覧を作成した。⁴⁵それが、「表2 田辺聖子『欲しがりません勝つまでは』に見える文学作品等一覧」である。

表1と表2とを比較すると、表2では、おそらくは田辺の年齢を反映して、少女小説や少年小説に分類される、吉屋信子や佐藤紅緑、横山美智子の名前、あるいは山中峯太郎、高垣眸らの作品名がまず目を引く。〈文学少女〉田辺聖子の姿が浮かび上がってくる。また、吉川英治や江戸川乱歩、横溝正史、牧逸馬、菊池寛らのいわゆる

表1 田辺聖子『十八歳の日の記録』に見える文学作品・映画・演劇・音楽等一覧

| 昭和 | 記事年月日 月 日 | 文学作品などの書籍 | 映画・演劇&音楽 | 歴史上の人物等 | 備考 | |
|----|--------------|--|---|-------------------------------------|----------------|-----------------------|
| | | | | | 樟蔭関係以外 | 樟蔭関係 |
| 20 | 4月10日 | 白居易『長恨歌』*、 ☆岩田豊雄『海軍』 | | 高群逸枝、 神近市子 | | 石部先生? |
| | 4月11日 | ヘルマン・ヘッセ『青春は美し』*、 | | | | |
| | 4月13日 | アンデルセンの童話*、 バイブル(『聖書』)*、 オルコット『若草物語』* | | | | |
| | 4月14日 | 井伏鱒二、 山本周五郎_好短編集、 『曾我物語』、 吉川英治『宮本武蔵』(1936~39年) | | | ブルー・ストッ キング | |
| | 4月16日 | | ヴィリ・フォルスト 『ウィーン物語』* (1941年、オーストリア) | | | |
| | 4月18日 | 『中学時代』? | | | | |
| | 4月20日 | 『中学時代』? (前出) | | | | |
| | 4月23日 | | 佐々木康『米英撃滅の 歌』[劇中劇『カルメ ン』*] (1945年、日 本) | 藤原義江(左記映 画出演者) | | |
| | 4月27日 | 芥沢光治良『希望の書』 | | | | |
| | 4月30日 | 増田四郎『独逸中世史の研究』(1943 年)、 石坂正蔵『歌語史論考』(1944年)、 栗原信一『明治開化史論』(1944年)、 渡辺滋『日本鍵針考』(1944年)、 『日本の石仏』?、 『日本の版画』? | | | | |
| | 5月2日 | ☆マーガレット・ミッチェル『風と共に去 りぬ』*、 レイモント『農民』* | | ムッソリーニ、 ヒトラー | | |
| | 5月5日 | 『古事記』、 石井鶴三『宮本武蔵挿絵集』(1942 年) | | | | |
| | 5月10日 | | | | | 文学史 |
| | 5月17日 | 吉川英治『宮本武蔵』(前出)(寸劇にし て演じる/5月15日にも学科内で演じてい る) | | 「郡是ロマンス」、 『行春哀歌』(旧制第三 高等学校寮歌) | | |
| | 5月21日 | 栗原信一『明治開化史論』(前出)、 エーヴ・キュリー(?)『キュリー夫人 伝』、 パールバック『大地』* | | | | |
| | 5月23日 | 藤田元春参考書(書名不明)、 ☆藤田東湖『正気の歌』 | | | | |
| | 5月25日 | | | 吉川緑波 | | |
| | 6月4日 | | | | | 『翠蔭』(樟蔭女 子専門学校の雑誌) |
| | 6月24日 | 大本宮陸軍部『国民抗戦必携』(1945 年) | | | | |
| | 7月29日 | 紫式部『源氏物語』、 『方葉集』 | | | | 文法、女性史 |
| | 9月4日 | 大島憲太「世の中は三日見ぬ間に桜かな」 (『藤太句集』)、 菅原孝標女『更級日記』 | | | | |
| | 9月9日 | 『論語』*、『孟子』*、『史記』*、 『左伝』*、『魏志』* | | | | |
| | 9月10日 | オルコット『若草物語』*(前出) 四人 姉妹 | | | | |
| | 9月11日 | 前田多門「青年学徒に告ぐ」 | | | マリー・キュリー | |
| | 9月14日 | 菅原孝標女『更級日記』(前出)、 尾崎士郎(『成吉思汗』1940年) | | | | |
| | 9月21日 | 菅原孝標女『更級日記』(前出)、 『孟子』* 紫式部『源氏物語』(前出) | | | | |

| | | | | | | | |
|----|--------|--|--------|--|------------------------------------|---------|----------------------------|
| | 9月22日 | | 「海砂かぼ」 | | | | |
| | 10月2日 | | | | | | ☆歌舞伎、 ☆宝塚 |
| | 10月6日 | ハイデ（ヨハンナ・シュペリ『アルプスの少女ハイジ』*）、 バレアナ（エレナ・ボーター『少女バレアナ』『バレアナの青春』*） | | | | | |
| | 10月7日 | ズーダーマン『憂愁婦人』*、 パールバック『大地』*（前出） | | | | | |
| | 10月14日 | 祭式部『源氏物語』（前田）、 清少納言『枕草子』 | | | 夏目漱石 | | |
| | 10月19日 | | | | 蔭介石、 守山義雄（朝日新聞記者） | | |
| | 10月21日 | パールバック『母の肖像』『戦える使徒』 * | | | | | |
| | 11月21日 | ジーン・ウェプスター『あしながおじさん』*ジュディ | | | | | |
| | 11月22日 | 西行『山家集』 | | | | | |
| | 11月23日 | ジュディ（ジーン・ウェプスター『あしながおじさん』*（前出））、 ケアリ（ウィリアム・サマセット・モーム『人間の絆』*） | | | | | |
| 21 | 2月5日 | | | | | | 「ヘレニズムとヘ プライズム」（文化講座） |
| | 2月6日 | 「浩然の気」（『孟子』*（前出））、 『論語』*（前出） | | | | | |
| | 2月14日 | 『日本書紀』 | | 『頼朝の死』（歌舞伎演目、文芸会国ニクス演目） | | | |
| | 2月19日 | | | マイアー・フェルスター「アルトハイデルベルク」*（燺辺クラブ新劇部公演） | | 燺辺クラブ | |
| | 2月28日 | | | 文芸会上演『頼朝の死』（前出） | | | |
| | 3月4日 | 「生者必滅 会者定離」「盛者必衰」「一切皆空」（仏語） | | | 孔子（伊賀駒吉郎校長葬儀の際、故人を例える） | | 伊賀駒吉郎 |
| | 4月10日 | 有筋武部全集（『カインの末裔』『お末の死』『フランスの顔』『迷路』） | | | | | 投票日（戦後初の衆議院議員選挙、女性参政権初の行使） |
| | 4月13日 | ☆『方葉女性の歌』？ | | | | | |
| | 4月19日 | 『古事記』（前田） | | | | | |
| | 4月20日 | | | | | | 有職故実 |
| | 4月23日 | | | シドニー・サルコウ『風雲のベンガル』*（1938年、アメリカ/1946年4月公開）、 マイケル・カーティス『進め龍騎兵』*（1936年、アメリカ）、 ユナイテッドニュース*（アメリカ） | | | |
| | 4月24日 | | | | 三木喜代子 | 常用漢字の決定 | |
| | 4月25日 | | | | | 燺辺クラブ | |
| | 4月28日 | 『キューリー夫人伝』*（前出） | | | 顔回 | | |
| | 4月29日 | 『日本書紀』（前出） | | | | | |
| | 5月2日 | 陶淵明「盛年重ねて来たらず・・・」（『雜詩』其一）* | | | 福沢諭吉「真の文明は物質と精神の両方面に依つ」（『文明論之概略』カ） | | |
| | 5月4日 | | | | | 燺辺クラブ | |
| | 5月15日 | 嘉村磯多 小説集 | | | | | 校友会文学班班長となる |

| | | | | | | |
|----|--------|---|--|--|---------------|--|
| | 5月19日 | | ジョン・M・スタール 『王国の鍵』* (1944年、アメリカ/1946年5月2日公開) | | | |
| | 5月20日 | | ジョン・M・スタール 『王国の鍵』* (前出) | | | |
| | 5月21日 | | | | | 千葉先生「文化国家論」(社会科学部) |
| | 5月24日 | 横光利一『紋章』 | | | | 短歌会開催、本城先生、横光利一についての講義(月曜日放課後に実施予定) |
| | 6月21日 | | | | | 文学班の雑誌刷り上がる |
| | 7月17日 | 『莊子』* | | | | |
| | 8月3日 | 『女島の君』『連綿別王』(『古事記』『日本書紀』(前出))、 『小碓と佐那彦』(『古事記』(前出)) | | | | |
| | 8月8日 | アグネス・ザッパー『愛の一家』* | | | | |
| | 8月16日 | 『老子』*、『論語』*(前出)、『莊子』(前出)*、近松門左衛門『心中天網島』:定期試験の準備勉強 | | | | 文学史、文法 |
| | 9月20日 | | | | | 安田章生:文学概論・国語学史 |
| | 10月5日 | | | | 「天平文化講座」(於相愛) | 安田章生先生 |
| | 10月18日 | | (10月27日開催予定/公開文芸会上演演目) 『頼朝の死』(前出) | | | |
| | 11月18日 | アンドレ・ジイド『女の学校・ロベエル』* | | | | |
| | 11月24日 | 亀井勝一郎『聖徳太子』(1946年) | | | | 万葉旅行(引率:安田章生先生) |
| | 11月30日 | | ロイ・ローランド『緑のそよ風』*(1945年、アメリカ/1946年12月公開) | | | |
| | 12月12日 | ジョン・キーツ『メッグ・メリリーズ』* | | | | |
| | 12月13日 | | | | | 昨日(12月12日)京都御所清涼殿殿上拝観 |
| | 12月23日 | 蔡琰「悲憤詩」*、?「焦仲卿妻」(『樂府詩集』)*など(関矢先生講義関連) 織田作之助、太宰治、坂口安吾など(安田先生講義関連) | | | | 冬期講習受講(12月16日~21日)関矢先生「支那文学史、詩について」、安田先生「短歌の閑閑」、本城先生「夢、現実、象徴、フランス文学」(1日のみ受講) |
| | 12月31日 | | | | | (学校生活1年を振り返って)文芸会、音楽会、短歌会、文学班雑誌発行、哲学 |
| 22 | 1月4日 | | (1月2日)リチャード・ボレスラウスキー『嘘無情』*(1935年、アメリカ)カ | | | |
| | 1月19日 | | ウェズリー・ラッグルス『アリゾナ』*(1940年、アメリカ/1946年8月公開) | | | |

| | | | | | |
|-------|-------------------------------------|---|--------------|----------------------------|------------------|
| 1月20日 | | 同窓会行事：『どん底』* (於朝日会館) | | | |
| 1月27日 | 中條 (宮木) 百合子『仲子』 | | | | |
| 1月28日 | (教育実習関連) 『更級日記』 (前田) 「あづまじ」 藤沢桓夫_作品 | | | | 藤沢桓夫宅訪問 (引率安田先生) |
| 2月5日 | | ジュリアン・デュヴィヴィエ『にんじん』* (1932年、フランス/1934年公開) | | | |
| 2月10日 | | | (教育実習関連) 阿仏尼 | | |
| 2月26日 | (2月13日/教育実習関連) 『新古今和歌集』 | | | | |
| 3月4日 | | (ラッセ会関連) 「仰げば尊し」、吉丸一昌訳詞「ふるさとをはなるる歌」(原曲：ドイツ民謡・歌曲『Der letzte Abend 最後の夜』、『新作唱歌 第五集』(1913年)に掲載された日本の唱歌/田辺歌唱) | | | (3月2日) クラス会 |
| 3月10日 | | | | (3月9日) 田辺脚本「シンデレラ」(於相愛) 見学 | |

注

- 1) 一覧表中、外国作品には、*印を付した。
- 2) 一覧表中、友人が所持していたり、友人との会話中などに登場してきたものには☆印を付した。
- 3) 「映画・演劇&音楽」欄のうち、映画の公開日等の情報については、「映画.com」(<https://eiga.com/>)の「作品情報」に基づき、表記した。

「大衆小説」と分類される作家たちの名も目を引く。こうした作家たちの作品に加えて、雑誌『キング』(No.23)が確認できるのも、田辺自身が回顧するように、女学校時代から同年代の少女たちよりも少し早く大人びた作品に触れ始めていたことを示している^⑩。

また、田辺がその時期執筆していた作品との関連から見ると、表2では、No.53と55、No.57と63、そしてNo.12の山中峯太郎の冒険小説が、中国大陸への興味・関心と連動しているとみなせよう。そうした作品群に加えて、樟蔭女専時代には、中国古典の漢文それ自体に田辺が興味・関心を持つようになっていたことが注目されよう^⑪。

さらに注目したいのは、既に表2でもNo.30と34において、パールバック『大地』^⑫などの外国文学の翻訳物を確認できるが、表1では、翻訳物がさらに顕著に登場してきているように見える。樟蔭女専入学以前には、『あしながおじさん』や『若草物語』『黄色の帝王蛾』(リンバロストの少女)^⑬といった翻訳少女小説が主であったものが、樟蔭女専入学後の『日記』段階になると、いわゆる教養主義的な作品へも興味・関心が広がりを見せていると判断してよいのではないだろうか。マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』、ノーベル賞作品のパールバック『大地』やレイモンド『農民』、サマセック・モームの代表作『人間の絆』、ズーダーマンの長編『憂愁夫人』、またパールバックの作品でもノンフィクションの『母の肖像』『戦える使徒』などの作品がそれである。

ここで少し目を転じて、田辺の読書のための本の入手手段についても見ておこう。昭和二〇年六月四日の大阪大空襲で、田辺は「三

表2 田辺聖子『欲しがりません勝つまでは』に見える文学作品等一覧

| No. | 文学作品などの書籍・作家 および映画・演劇・音楽など | 歴史上の人物等 | ページ |
|-----|-------------------------------|--------------|-----|
| 1 | | ジャンヌ・ダルク* | 20 |
| 2 | | 木村重成とその妻 | 22 |
| 3 | | 大葉子 | 22 |
| 4 | | 大田垣蓮月尼、野村望東尼 | 23 |
| 5 | | 会津藩の武士の妻・娘 | 23 |
| 6 | 吉屋信子 | | 23 |
| 7 | 『少女の友』 | | 23 |
| 8 | 『セウガク六年生』 | | 23 |
| 9 | 『少女倶楽部』 | | 23 |
| 10 | 『少年倶楽部』 | | 23 |
| 11 | | 中原淳一〔の絵〕 | 24 |
| 12 | 山中峯太郎『敵中横断三百里』『大東の鉄人』『亜細亜の曙』 | | 24 |
| 13 | 佐藤紅緑 | | 30 |
| 14 | 横山美智子 | | 30 |
| 15 | 『小公女』* | | 32 |
| 16 | 『小公子』* | | 32 |
| 17 | 夏目漱石 | | 32 |
| 18 | 武者小路実篤 | | 32 |
| 19 | 翻訳小説* | | 32 |
| 20 | 江戸川乱歩 | | 32 |
| 21 | 横溝正史 | | 32 |
| 22 | 吉川英治 | | 32 |
| 23 | 雑誌『キング』 | | 32 |
| 24 | | (ナボレオン*) | 35 |
| 25 | | (源義経) | 35 |
| 26 | 『伴先生』 | | 39 |
| 27 | 吉川英治『宮本武蔵』 | | 43 |
| 28 | 菊池寛 | | 45 |
| 29 | 牧逸馬 | | 45 |
| 30 | 『あしながおじさん』* | | 46 |
| 31 | 『若草物語』* | | 46 |
| 32 | ジーン・ポーター『黄色の帝王蛾(リンバロストの少女)』* | | 46 |
| 33 | 『風と共に去りぬ』* | | 46 |
| 34 | パールバック『大地』* | | 46 |
| 35 | 開元の治〔教科書〕 | | 49 |
| 36 | (『病院船』) | | 54 |
| 37 | (夏目漱石『こころ』) | | 57 |
| 38 | (国木田独歩『牛肉と馬鈴薯』) | | 57 |
| 39 | 山川弥千枝『薔薇は生きている』 | | 62 |
| 40 | 『更級日記』 | | 63 |
| 41 | 『源氏物語』 | | 64 |
| 42 | 林芙美子『風琴と魚の町』 | | 66 |
| 43 | 吉屋信子『勿忘草』 | | 66 |
| 44 | 『ジャックと豆の木』〔英語〕* | | 72 |
| 45 | 【『恋愛二重奏』】 | | 73 |
| 46 | 【『戦うドイツの少女』】 | | 73 |
| 47 | 【『代用食の研究』】 | | 73 |

| | | | |
|----|--|-------------------------------|-------------|
| 48 | | 天皇陛下 | 85 |
| 49 | | 九軍神 | 89 |
| 50 | 高垣眸『まぼろし城』『大陸の若鷹』 | | 95 |
| 51 | 『宝島』* | | 99 |
| 52 | 中里介山『大菩薩峠』 | | 103 |
| 53 | 吉川英治『三国志』 | | 104 |
| 54 | 河口慧海_チベット探検記 | | 110 |
| 55 | 満州・蒙古への旅行記 | | 110 |
| 56 | | 満州国皇帝 | 110 |
| 57 | 山中峯太郎『わが日東の剣侠児』 | | 112 |
| 58 | 蒙古旅行記 | | 114 |
| 59 | 〔河口慧海カ〕『チベット潜入記』 | | 114 |
| 60 | 『活仏の都』 | | 114 |
| 61 | 〔尾崎士郎カ〕『成吉思汗』 | | 114 |
| 62 | 『元朝秘史』 | | 115 |
| 63 | 『成吉思汗ものがたり』 | | 120 |
| 64 | 『アンデルセン』岩波文庫 | | 124/ 162 |
| 65 | 大川周明『日本二千六百年史』『日本精神研究』 | | 133 |
| 66 | 王仁「千字文」 | | 135 |
| 67 | | 東条英機 | 137 |
| 68 | 「戦時下女学生に与える言葉」 | | 150 |
| 69 | 『聖書』 | | 151 |
| 70 | | 日蓮上人 | 153 |
| 71 | | キリスト | 154 |
| 72 | 愛国百人一首 | | 166 |
| 73 | 『万葉集』防人の歌 | | 166 |
| 74 | 巖谷小波『こがね丸』 | | 172 |
| 75 | | 山本五十六 | 174 |
| 76 | | アツ島_山崎〔保代〕大佐 | 174 |
| 77 | | 『少女の友』選者川端康成 | 188 |
| 78 | ☆『海ゆかば』〔合唱〕 | | 189 |
| 79 | ☆『海軍』〔1943年公開〕 | | 192 |
| 80 | | 伊賀駒吉郎校長 | 197 |
| 81 | | 汪兆銘 | 204 |
| 82 | | 清少納言 | 211 |
| 83 | | 蒋介石 | 214 |
| 84 | ☆「予科練」の歌 | | 233 |
| 85 | 「みたみわれの誓い」／「みたみわれ いけるしるしあり・・・」(『万葉集』996) | | 239 |
| 86 | 尾崎士郎『成吉思汗』 | | 247 |
| 87 | | エスガイ | 247 |
| 88 | | エスガイの子テムジン〔ジンギスカン〕以下、関連する人物省略 | 248 |
| 89 | 歌誌『アララギ』 | | 254 |
| 90 | | 小磯国昭・鈴木貴太郎 | 255 |
| 91 | ☆宝塚歌劇のプロマイド・プログラム | | 268 |
| 92 | | 下村宏内閣情報局総裁 | 270 |
| 93 | | 〔沖繩軍〕牛島満司令官 | 271 |
| 94 | 『国民抗戦必携』 | | 271 |
| 95 | 「重大放送」〔「終戦」の詔書放送〕 | | 277 |

| | | | |
|----|--------------------------------------|--------|-----|
| 96 | | 東久邇宮裕彦 | 288 |
| 97 | | マッカーサー | 291 |
| 98 | 『青少年学徒に告ぐ』〔前田多門『青年学徒に告ぐ』1945年9月9日放送〕 | | 292 |

注

- 1) 映画・演劇・音楽には、☆印を付した。
- 2) 外国作品には、*印を付した。
- 3) 一覧表中、()内は田辺の創作の中に登場するもの。
- 4) 一覧表中、【 】内は田辺以外の友人などに関わるもの。
- 5) 一覧表中、〔 〕内には、補足事項を記した。
- 6) 一覧表中、『日記』にも登場する作品等については、下線を付した。
- 7) 「ページ」欄は、ポプラ文庫本『欲しがりません勝つまでは』(ポプラ社、2009年)による。

百冊ぐらゐの本、焼いてもたわ^⑤」と言う。そうした田辺の蔵書は、古本屋から購入することが多かった模様である。『欲しがりません勝つまでは』には、次のように記されている。^⑥

(前略) 私は野田阪神駅前の十六堂という古本屋へ行って、欲しい本をいっぱい買ってくる。読んでしまうと、また持ってゆく。すると、十六堂のおじさんは、買戻してくれるのであった。吉屋信子の小説に夢中になって、一冊のこらず読んでいた。『あしながおじさん』や『若草物語』や、『黄色の帝王蛾』という翻訳少女小説、それに、『風と共に去りぬ』やパール・バックの『大地』も、みな、古本屋から買ってきて読んだ。こうした古本屋からの購入が、

当時の庶民の中で読書好きの人びとが本を手に入れる際、有効な手段であったとみなせよう。さらに田辺のような典型的な(文学少女)、熱心な読書家にあつては、気に入った本、大切にしたいと思つた本は手元に残したのである。田辺の場合、そうした本が約三百冊にも達していたことになる。

ところで、『日記』には、本の購入と売却に関わる印象的な記述がある。

購入に関わるのは、先に指摘した増田四郎らの本を入手した場面である。^⑦おそらくは、蔵書を疎開先にまで持って行くことができないと判断した持ち主がそれらを売りに出していたのであろう。それを見た田辺は、「いい本がずらりと並んでいる。片端から気に入ったのを買って、(中略)三十円は越えたであらうか。」と記す。^⑧文学少女の面目躍如、嬉々として気に入った本を買い集める田辺の姿が目につかんでくる。

一方、売却に関わるのは、父親を亡くし経済的に困窮していた時、田辺が自身の蔵書を売りに行く場面である。^⑨

(前略) 午後四時頃、私は縁側の本箱を引っくり返して目ぼしい書物をさらえ、それを風呂敷に包んで、甲子園の方へ売りに行った。(中略)

疎開してでもあったらよかつたのだが、弟が埋めておいたままで、私は郡是の寮へ行った留守だから、ほんとに金目のものや、貴重な本や愛読書なんかは助からなかつた。あの私の本だけでなく、本、払底の今日、ひと財産だと思ふのに。こんな気持ち

ち、罹災していない人、わかりっこなし。むしゃくしやる。三冊、持ってゆくと、それでも二十二円に買ってくれた。母はその金でやっと胡瓜を買った。

大阪大空襲によって自身の蔵書を失った田辺の悔しさが伝わってくる。同時に戦後すぐの時期、本がその希少価値^⑥からある程度の経済的価値をも有したことが知られる。ただ、その価値も食糧難の前ではわずかな有効性を果たすに過ぎなかったのであるが。

なお、こうした古本屋からの購入以外には、読みたい本を持っている人から借り受けるというのも当時の読書の仕方であった。そして、読書好きの学生・生徒にとっては、学校の図書館が重要な役割を果たした。

田辺は『日記』の中で、「(前略) 図書へ行けば見たい本だらけ。それも二冊しか借りられないので困る。本屋の店頭には満足するよくな本は手に入らぬし、入っても買えぬし、勢い図書で借りたいのに。」と記す。これとほぼ同じことを意味する次のような記述が『欲しがりません勝つまでは』の中にある。

(前略) 町は焼野が原で、本屋もなく、出版社もまだできない。学校が焼け残ったので、図書館のあるのはたいへんな幸運だった。見たい本だらけであるが、いっぺんに二冊しか借れない。私はとっかえひっかえ本を読んだ。

いくら読んでも読みつくせない。

咽喉がかわききっていたところへ水を飲むように、手当りしだいに読んだ。いまはもう信じられるのは、こんなことだけ

たいな気がする。

敗戦直後、本の入手が極めて困難になっていた時期、樟蔭女専の図書館が田辺の本への渴望を満たす役割を果たしたのである。田辺は、文字通りむさぼるように図書館の本を読んだのであろう。樟蔭女専が空襲の被害を被らなかつたことは、本当に幸運であった。そしてそれが、後の時代を代表する作家・田辺聖子を生み出す大切な素地を準備することになったと考えるとよいであろう。

以上、『日記』と『欲しがりません勝つまでは』の記載内容を比較検討することで、田辺の高等女学校から女子専門学校にかけての時期における読書の傾向や具体像に光をあてることができたと考える。そしてそこから発展して、戦時下から敗戦直後の時期にかけて高等教育機関に学ぶ女学生たちの読書事情についても浮かび上がってきたと言えよう。

(3) 小説「無題」に見る女学生の〈欲〉の形成

『日記』には、戦争を背景とした女子専門学校を舞台にした小説を書くという構想^⑦の下、田辺が執筆した未完の小説「無題」が遺されていた。この小説「無題」で舞台とされた女子専門学校のモデルが樟蔭女専であったと考えられることは言うまでもない。したがって、小説「無題」と『日記』記事とを併せ読めば、田辺が在学していた時期の樟蔭女専の教育内容や学校生活をより具体的に検討することが可能になる。そこで、この小説「無題」に現れてくる文学作品、映画・演劇や音楽などについて、『日記』や『欲しがりません

表3 田辺聖子 小説「無題」に見える文学作品等一覧

| No. | 文学作品などの書籍 | 映画・演劇&音楽 | 歴史上の人物等 | 備考 | ページ |
|-----|--------------------------------------|--|----------------------|-------|-----------|
| 1 | 『論語』*中国 | | | | 192下 |
| 2 | | | 孔子* | | 193上 |
| 3 | | | | 感想発表会 | 194中 |
| 4 | | | 清野謙次(病理学者、人類学者、考古学者) | | 196上 |
| 5 | 白鳥庫吉「数詞について」 | | | | 198上 |
| 6 | | 松島詩子「マリネラ」(1940年) | | | 199上 |
| 7 | 『徒然草』 | | | | 199中 |
| 8 | ヘルマンヘッセ『青春は美(わ)し』*ドイツ・スイス | | | | 202中 |
| 9 | 『源氏物語』(「雨夜の品定め」、夕顔、女三の宮) | | | | 204上・中 |
| 10 | モーパッサン『女の一生』*フランス、ジャンヌ | | | | 204上 |
| 11 | 北原白秋『白秋詩抄』(岩波文庫、1933年) | | | | 208上 |
| 12 | 樋口一葉『たけくらべ』(1895~96年) | | | | 211下 |
| 13 | 国木田独步『竹の木戸』(1908年) | | | | 211下 |
| 14 | 芹沢光治良『希望の書』 | | | | 212上 |
| 15 | エーヴ・キュリー(?)『キュリー夫人伝』*フランス? | | | | 212上 |
| 16 | バーネット『小公子』*アメリカ | | | | 212中 |
| 17 | ゲーテ『若きヴェーテルの悩み』*ドイツ | | | | 212下 |
| 18 | 堀辰雄『風立ちぬ』 | | | | 213中 |
| 19 | 夏目漱石『それから』『門』 | | | | 213下 |
| 20 | トーマス・ハーディ『テス』(『ダーバヴィル家のテス』)*イギリス | | | | 213下 |
| 21 | ビョルンステイエルネ・ビョルンソン『シンネヴェ・ソルバック』*ノルウェー | | | | 214中 |
| 22 | パールバック『大地』*アメリカ | | | | 214中 |
| 23 | オールcott『四人姉妹』(『若草物語』)*アメリカ | | | | 214中 |
| 24 | 吉川英治『宮本武蔵』 | | | | 214中 |
| 25 | 『古事記』 | | | | 214中 |
| 26 | ツルゲーネフ『初恋』*ロシア | | | | 215上 |
| 27 | ヘルマンヘッセ『車輪の下』*ドイツ・スイス | | | | 215下 |
| 28 | ロマン・ロラン『ジャンクリストフ』*フランス | | | | 215下 |
| 29 | 川端康成『禽獣』(1933年) | | | | 215下 |
| 30 | 菅原孝標女『更級日記』 | | | | 215下 |
| 31 | マーガレット・ミッチェル『風と共に去りぬ』*アメリカ | | | | 215下 |
| 32 | 芹沢光治良『命ある日』(1940年) | | | | 215下 |
| 33 | チャベックの童話*チェコスロバキア | | | | 215下 |
| 34 | フィヒテ『智識学』*ドイツ | | | | 215下 |
| 35 | | 岡本綺堂『修禪寺物語』(1911年、1918年小説) | | | 217上 |
| 36 | | 坪内逍遙『牧の方』(1896年) | | | 217上 |
| 37 | | シェイクスピア『ハムレット』『リヤ王』『ロミオとジュリエット』*イングランド | | | 217上、218上 |
| 38 | 『竹取物語』 | | | | 217上 |

| | | | | | |
|----|--|--|-------------------------|-----------|------------|
| 39 | | ヴィルヘルム・マイヤー ニフェルスター『アルト ハイデルベルク』*ドイツ | | | 217上 |
| 40 | | | | 『十八の日の記録』 | 219下 |
| 41 | | | 豊織入姫命、御間城入彦（『古事記』『日本書紀』 | | 221上 |
| 42 | 森本治吉「和珥坂の乙女」（『むらさき』1940年、所収） | | | | 221上 |
| 43 | | | 高群逸枝（女性史） | | 221中 |
| 44 | | ミゲル・デ・セルバンテス『ドン・キホーテ』*スペイン | | | 221下 |
| 45 | 額田王「あかねさす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる」（『万葉集』20） | | | | 223下 |
| 46 | 『万葉集』 | | | | 224下 |
| 47 | | | | 法隆寺見学 | 224下 |
| 48 | | | 聖徳太子 | | 226上 |
| 49 | 中里介山『夢殿』（1929年） | | | | 226上 |
| 50 | | | 清少納言 | | 228下 |
| 51 | 『万葉集』731（坂上大嬢）、2574（不詳）、602（笠女郎） | | | | 229中・下 |
| 52 | | 国歌（「君が代」） | | | 234下（244上） |
| 53 | | 『海ゆかば』（1937年） | | | 234下 |
| 54 | | ヨハン・シュトラウス2世「美しき青きドナウ」*オーストリア | | | 237中 |
| 55 | 学校の勉強「漱石の文学、則天去私、非人情、源氏、枕、弥生式土器、つれづれなるままにひぐらし硯に向ひて・・・」 | | | | 241中 |
| 56 | | リッカルド・ドリゴ「セレナーデ」（『百万長者の道化師』より）*イタリア | | | 242上 |
| 57 | | 『愛国行進曲』（1937年） | | | 244上 |
| 58 | | 「大空に祈る」（1943年） | | | 244上 |
| 59 | | 浪曲 | | | 244上 |
| 60 | | | | 女性解放史 | 246上 |
| 61 | | 『湖畔の宿』（1940年） | | | 246下 |
| 62 | | 『行春哀歌』（旧制第三高等学校寮歌） | | | 247上 |

注

- 1) 一覧表中、外国作品や外国人については、*印を付した。
- 2) 『日記』本文中に登場する作品や人物、事項については、下線を付した。
- 3) 「ページ」欄には初出ページのみを示し、2度目以降の登場については省略した。

勝つまでは』と同様に整理したのが、「表3 田辺聖子 小説「無題」に見える文学作品等一覧」である。以下、これまでの表1・表2とも比較対照しながら、表3について見てみたい。

まず、田辺が自ら好きな作家として公言する吉川英治の『宮本武蔵』(No.26)、また同じく田辺が深い関心を寄せ、小説化しようとしていた菅原孝標女の『更級日記』(No.30)が登場している。そして、田辺にとってなじみの深い古典作品の『徒然草』『源氏物語』『古事記』『万葉集』などが確認できることは、古典作品に対する田辺の興味・関心を示すものと言える。

次は、樟蔭女専における田辺の経験が直接的に反映しているのではないかと推定できる作品等である。それに該当するのは、まず法隆寺見学について叙述された部分に登場するNo.47〜51である。田辺らの学年は昭和一九年五月十五日に法隆寺見学に出かけており、その際の状況が活かされていると推測される。また、森本治吉「和珥坂の乙女」(No.42)も田辺の直接的な経験を反映したものと見なせよう。既に拙稿二〇二三でも触れたが、森本のこの論文は、田辺が課題として提出した論文「上古の女性」に関わる参考文献であったと考えられる。田辺の論文は、担当の千葉政清先生から極めて高い評価を受けていた。そうした田辺のプラス体験を映す形で、「無題」の中に登場しているのではないだろうか。なお、文学作品ではないが、「海ゆかば」(No.53)や「愛国行進曲」(No.57)、「大空に祈る」(No.58)は、いずれもこの小説「無題」の時代設定とされている太平洋戦争末期の戦意高揚のために歌われた楽曲である。そうした点

からすれば、これらもまた田辺の直接的経験の反映と見なしてよいであろう。小説「無題」が執筆された戦後直ぐの占領期からは少し遡るが、戦争一色の時代の雰囲気を示す上では有効な用語、楽曲名と言えよう。

最後となるが、表3において最も注目されるのは、No.8〜34の文学作品群である。これらは、「感想発表会」の場面や現代文学の授業において感銘を受けた本を紹介する場面⁽¹⁴⁾で、女子専門学校の生徒たちがあげた文学作品名である。ここでは小説であるから登場人物たちそれぞれの口を借りて名前があげられた作品がほとんどであるが、おそらく田辺自身は既にこれらの作品を読破し終えていたのではないだろうか。

こうした文学作品の名を見ると、表2に見える田辺自身がよく取り上げる少女小説や少年小説とは異なり、外国文学の翻訳物、近代文学史に登場してくるような作品の名前が並んでいる。ゲーテ、ヘルマンヘッセ、ロマン・ロランらの作品が並んでおり、表1と表2との比較から指摘した、教養主義的な作品と言え換えることができるラインナップと言えよう。

かかるラインナップは、『欲しがりません勝つまでは』の中で田辺が、「女学校では、大衆小説や純文学の区別なんか、誰もせずに、面白い小説、面白くない小説としか、区別していなかったけれど、女専では、大衆小説というと、軽蔑の対象になった。そこが大きなちがいであった。上級学校では、エリートらしく、インテリらしく、好みも趣味も、それにふさわしいのをもつべきであるらしかった」⁽¹⁵⁾

と述べる状況と重なってくる。樟蔭女専において田辺は、まさに当時のエリート女性に相応しい読書体験を積み重ねていたと言えよう。

小説「無題」は、田辺の創作であり、田辺がその頃理想とした姿や夢想したことが盛り込まれていたとしても、その一方で、田辺自身が当時在学していた樟蔭女専での経験や当時の樟蔭女専の雰囲気⁽⁶⁾を反映していると考えられる。田辺は「私は女専の生徒のことを懸賞小説に書いてみようかと思うが、唯一の材料である日記を焼いてしまつて惜しいことをした。(中略)クラスの人の性格をかきわきたい希望で、背景に女専生徒の思想や教育程度を、とかく忘却しがちな世間にしらせたい。(傍線筆者)」と書く。先に触れた田辺の読書体験などは、まさに当時の女子専門学校における教育の豊かさを示唆している。そうした環境の中で、田辺は自らの〈知〉を深めて行つたのである。

むすびにかえて

以上、田辺の再発見された『日記』の記述と自伝的作品群の叙述を比較対照することで、樟蔭女専在学中の田辺の学校生活や学びの過程に接近することを試みた。筆者の田辺文学に関する知識と認識が浅薄で、表面的な考察にとどまった点、また、田辺が読んだ作品のピックアップ作業にも不備がある点など、今後より精度を増して行きたいと思う。

ただ、これまで意識することなく「樟蔭女専時代の学びが田辺文

学の基礎になった」と語ってきたことについて、具体的な内容をいくらかは付け加えることができたと考ええる。樟蔭女専国文科の授業で古典文学について深く学んでいたと言っただけにとどまらず、田辺は、高等女学校時代以来の、さらには樟蔭女専入学後に対象を拡大させた読書によって、幅広い教養⁽⁷⁾を身につけて行つていたと考えられるのである。

ところで、哲学や歴史学、文学などの読書を通して人格の完成を目指す態度は、一般的に「大正教養主義」と呼ばれ、旧制高等学校を主な舞台として展開した。大正末から昭和初期にはその鬼子たるマルクス主義的教養主義が生まれるが、それは戦時下に弾圧され、壊滅する⁽⁸⁾。戦時下に高等女学校、そして女子専門学校に在学した田辺が身につけた教養は、一見する限り、読書を通して自らを高めることを目的とした「大正教養主義」的教養のように判断される。ただその教養は、田辺の場合、戦後、書くことを職業とする作家として結実した。戦前における教養主義の展開は、大学や旧制高等学校といった男子を対象として論じられることがほとんどである。そうした中で、本稿で明らかとなった田辺の読書体験とそれを通して身につけた教養のあり方は、敗戦をはさむ戦中から戦後直ぐの時期に青年期を過ごした、〈文学少女〉に始まり、女子専門学校で学んだエリート女性の、そしてついには書くことを職業とする〈作家〉へと至った人物の〈知の履歴〉として捉えることができよう。戦争体験という大きな要素を考慮に入れて分析する必要があるが、田辺の〈知の履歴〉のさらなる追究を今後の目標としたい。

注

- (1) 『文藝春秋』二〇二二年七月号。
- (2) 『朝日新聞』二〇二二年六月九日朝刊をはじめとして、まず、新聞各紙が取り上げている。また、翌二〇二二年八月にはNHKが、この日記をもとに「終戦の日」の特集番組「セイコグラム」を放送している。
- (3) 拙稿『田辺聖子 十八歳の日の記録』から見た樟蔭女子専門学校 漢文への関心と大江文城先生を中心に―(『樟蔭国文学』第五九号、二〇二三年、以下「拙稿二〇二三」と略記する)も参照されたい。
- (4) 稲垣恭子氏によれば、「女学生」とは、「主に旧制の高等女学校や女子専門学校などの高等教育機関に在籍する生徒・学生を総称することば」であり、「戦前期においては女性の教養層を代表する存在であった」と位置づけられている(稲垣恭子『女学校と女学生―教養・たしなみ・モダン文化―』(中央公論新社、二〇〇七年〈中公新書〉)四ページ)。
- (5) もちろん、後に時代を代表する作家となった田辺氏の事例をどれだけ一般化できるかは疑問の残るところであろう。ただ、この日記をつづっていた時点で田辺氏は、習作を友達に回覧するような創作意欲に富んだ〈文学少女〉であることは確かであり、作家になりたいとも望んではいないが、未だ著述を職業とする作家となっている訳ではないことは言うまでもない。したがって、「作家になりたいという強い思い」にさえ留意す

るならば、樟蔭女専在学中の田辺氏の学びの具体相から、当時の女学生の学びの過程に接近していくことはあながち無理な試みではないと考える。

- (6) 田辺聖子『田辺聖子 十八歳の日の記録』(文藝春秋、二〇二一年)。なお、同書には、日記本文だけでなく日記記事にはさまれる形で遺されていた田辺氏の未完の短・中編小説四編も収載されている(『日記』一七三～二五〇ページ)。そのうち中編の「無題」(『日記』一八八～二五〇ページ)については後述したい。
- なお、この『日記』も含めて、田辺氏の著作については、初出のみ「田辺聖子」の名を記し、それ以後は著者名を省略する。
- (7) 田辺聖子『私の大阪八景』(文藝春秋、一九六五年)所収。同書について本稿では、角川文庫本(KADOKAWA、二〇一八年発行)の改版再版本を使用する。
- (8) 梯久美子「解説―十八歳にして田辺聖子はすでに田辺聖子だった」(『日記』二五六～二五七ページ)。
- (9) 『日記』二五七ページ。
- (10) 『日記』二五八ページ。
- (11) 『日記』二五五～二六〇ページ。
- (12) 『日記』昭和二〇年六月二日・五日条。
- (13) 『私の大阪八景』二四六ページ。
- (14) 田辺聖子『欲しがりません勝つまでは』(ポプラ社、一九七七

年)。同書について本稿では、ポプラ文庫本(ポプラ社、二〇〇九年)を使用する。

(15) 『欲しがりません勝つまでは』二五七ページ。

(16) 『私の大阪八景』一八二〜一八三ページ。

(17) 『日記』六三〜六四ページ。

(18) 拙稿「教務日誌に見る昭和一九年度の樟蔭女子専門学校」

(『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第二号、二〇一二年、以下、「拙稿二〇一二」と略記する) 参照。

(19) 『日記』昭和二〇年四月十五日条によれば、昭和二〇年五月二十日頃をもって、樟蔭女専生は勤労働員から引き上げとなっている。

(20) 『欲しがりません勝つまでは』二九三ページ。

(21) 『日記』一〇八〜一〇九ページ。

(22) 『欲しがりません勝つまでは』二九三〜二九四ページ。

(23) 「われら御楯」の中で、動員先の寮における同級生たちとの会話を描いた際、「源氏も枕も万葉も近松も、みんなテキストは家にしまいこんだきりになっている。」(『私の大阪八景』一六三〜一六四ページ)と記しており、田辺が勤労働員までの段階でそれらを読んでいたを推定できる。

(24) 一九二六年の樟蔭女専開設時には「国文科」であり、田辺が入学した時点では、「国語科」と改称されていた。

(25) 拙稿「昭和初期の樟蔭女子専門学校国文科―昭和三年の『教授要目』と『検定ニ関スル試験問題集』から―」(『樟蔭国文

学』第四五号、二〇〇八年) 参照。

(26) 先の「夏目漱石」が和歌中に詠まれた事情は、この推測を呼び起こさせる。

(27) 田辺聖子『しんこ細工の猿や雉』(文藝春秋、一九八四年)所収。

(28) 『しんこ細工の猿や雉』一七〜一八ページ。

(29) 梯「解説―十八歳にして田辺聖子はすでに田辺聖子だった」(『日記』二五八ページ)。

(30) 『しんこ細工の猿や雉』一三七〜一四五ページ参照。

(31) 『しんこ細工の猿や雉』一七二〜一八〇ページ参照。

(32) 後のインタビューにおいても田辺は、「藤澤桓夫先生が、大阪から出てきた若い女の子っていうのでよくして下すって。

(下略)」(『国文学解釈と鑑賞 別冊 田辺聖子 戦後文学への新視角』(至文堂、二〇〇六年)一五ページ)と述べている。田辺は、「ファーストコンタクト」のみならず、藤沢氏宅の二度目の訪問についても、『しんこ細工の猿や雉』の中で詳細にふりかえっている(『しんこ細工の猿や雉』一七五〜一七六ページ)。

(34) 余談となるが、『日記』昭和二二年一月二十八日条で田辺は「私那不日、ひとかどの作家になった時、その名前が出たとき、藤沢さんはどう思うだろうか、いつかやって来た、あの小さい、無愛想な女の子のことを思い出すだろうか。／この女の子は作家に慣れて、野心に燃えています。／いつか、きっと

私は作家として立つてしよう。立たずにはいません。」(注…
／は原文中での改行を示す)と記している。余りにも将来を
予言するようで、印象深く感じたのは筆者だけであろうか。

(35) 『日記』一一六ページ。

(36) 『しんこ細工の猿や雉』九ページ。

(37) 『しんこ細工の猿や雉』一〇ページ。

(38) 『日記』昭和二年五月十五日条。

(39) 『日記』昭和二年二月十九日条。

(40) 『欲しがりません勝つまでは』三二三ページ。

(41) 田辺聖子『楽天少女通ります 私の履歴書』(日本経済新聞社、
一九九八年)。同書について本稿では、ハルキ文庫本(角川春
樹事務所、二〇〇一年)を使用する。

(42) 『楽天少女通ります 私の履歴書』一〇九ページ。

(43) 『日記』三五ページ。

(44) 田辺聖子『更級少女』(『欲しがりません勝つまでは』所収、
六三〜六五ページ)など参照。

(45) 田辺は女学校時代『祖国に告ぐ』という作品を書いたが、そ
れは「どうも中世のヨーロッパの話らしい」と回想している
(『欲しがりません勝つまでは』一五九ページ)。増田の著作を
購入したのは、この作品執筆の延長線上にあると推定できる
のではないだろうか。また、当時の中国大陸への田辺の興味・
関心については、漢文に対する興味・関心との関連から拙稿
二〇二三でも触れた。ただ、改めてこの昭和二〇年四月〜五

月という時期に注目するならば、この時期完成したとされる
作品『エスガイの子』(『欲しがりません勝つまでは』二四七
ページ)や、『日記』に遺されていた「蒙古高原の少女」(『日
記』一七四〜一七六ページ)や「公子クククの死」(『日記』
一七七〜一八四ページ)といった、中国大陸を舞台とした作
品との関係に注意すべきであろう。

(46) 吉川弘文館編集部編『日本史「今日は何の日」事典』367日+
360日・西暦換算併記』吉川弘文館、二〇二一年)二月二十
八日の項。

(47) 田辺聖子『田辺写真館が見た「昭和」』(文藝春秋、二〇〇五
年)一四四ページ。

(48) 田辺聖子『セピア色の映画館』(集英社、二〇〇二年、初出は
一九九九年)所収「あとがき」二〇八ページ。また、『欲しが
りません勝つまでは』所収「物書きは時代の証人」(三二二ペー
ジ)にも「私も松竹座には洋画を観に連れて行ってもらいま
した。」と記している。

(49) 『欲しがりません勝つまでは』表紙カバー裏面の広告文には、
田辺の「読書歴とともに13歳の頃から書いていた習作を紹介。」
とある。同書に登場する文学作品等について検討することで、
田辺の〈知の履歴〉の一端に接近することができるであろう。
(50) 『欲しがりません勝つまでは』三三一〜三三三ページ。武者小路実
篤や夏目漱石についても、同様に同年代の少女たちからする
と少し進んだ読書の対象であったとする。

(51) 『欲しがりません勝つまでは』一一〇・一一二～一一五ページ参照。

(52) この点については、拙稿二〇三参照。

(53) パールバックの『大地』は、田辺の中国大陸への興味・関心からも、その読書へ向かう必然性があったと言える。この点については、『欲しがりません勝つまでは』二二三～二四一ページ参照。

(54) 『欲しがりません勝つまでは』四六六ページ。

(55) 『欲しがりません勝つまでは』二六七ページ。

(56) 『欲しがりません勝つまでは』四六六ページ。

(57) 『日記』昭和二〇年四月三十日条。

(58) 「われら御楯」の中では、このエピソードに基づき、主人公のトキコが近所の本屋が疎開するというので、その売れ残りの中から「よりまくって、〈日本縫針考〉や〈敬語史論考〉という地味な本を買いこんだ」(『私の大阪八景』一八五ページ)という叙述がある。

(59) 『日記』昭和二年七月十八日条。なお、『しんこ細工の猿や雉』一三ページでは、この『日記』のエピソードにはほぼ正確に基づく叙述がなされている。

(60) 田辺自身、樟蔭女専で教科書として使用する『古事記』の入手に苦労していることが知られる(『日記』昭和二年四月十九日条)。また、田辺聖子「古典の森は花ざかり」の中で田辺は、「戦後すぐ、私は会社に通っていたのだけど、電車の中で

読む本がなくてね、町は焼け野原で出版物も出まわってない。(中略)しょうがないから、国文科時代のテキストばかり読んだの。」(田辺聖子・工藤直子『古典の森へ』集英社、一九九二年、一〇ページ、初出は一九八八年)と回想している。

田辺が樟蔭女専を卒業した一九四七年段階であっても、読書家には本の入手が容易ではなかったことをうかがわせる。

(61) 「しんこ細工の猿や雉」の中で田辺は、「いまは新刊本もないので、古本はたかく売れた。三冊で二十二円になった」(『しんこ細工の猿や雉』一三ページ)という書き方をしており、本によっては高値がついたことがうかがえる。ちなみにこの三冊のうちの一冊は、林芙美子の『青春』であったことも記されていることを付記しておく。

(62) 『日記』昭和二年四月十日条には、田辺が近所の神戸女学院の人に有島武郎全集を借りたことが記されている。また『日記』同年五月十五日条には、本城先生から嘉村磯多の小説集を借りたことが記されている。

(63) 『日記』昭和二〇年九月九日条。

(64) 『欲しがりません勝つまでは』二八七ページ。

(65) 『日記』昭和二〇年九月二十二日条。

(66) 拙稿二〇三参照。

(67) 『しんこ細工の猿や雉』九ページ。

(68) 『日記』昭和二〇年九月四日条。

(69) 拙稿二〇二所載の表参照。

- (70) 拙稿二〇二三、注(44)。
- (71) 拙稿二〇二三、九ページ
- (72) 『日記』昭和二〇年五月二十一日条。
- (73) 『日記』一九四ページ・二〇二〜二〇七ページ。
- (74) 『日記』二一一〜二一六ページ。
- (75) 『欲しがりません勝つまでは』二二七〜二二八ページ。
- (76) 拙稿二〇二三も参照されたい。
- (77) 『日記』昭和二〇年九月二十一日条。
- (78) 「教養主義」に関しては、竹内洋『教養主義の没落―変わりゆくエリート学生文化』(中央公論新社、二〇〇三年〈中公新書〉)を参照した。
- (79) 女性の教養について戦前から現代に至る長いスパンを射程に入れて本格的に論じたものとしては、前掲の稲垣『女学校と女学生―教養・たしなみ・モダン文化―』(中公新書)や、小平麻衣子『夢みる教養―文系女性のための知的生き方史』(河出書房新社、二〇一六年)があげられる。
- (80) 斎藤美奈子氏は、「田辺聖子に学ぶ、大人(の女性)のためのエッセイ講座」(『国文学解釈と鑑賞 別冊』田辺聖子 戦後文学への新視角、至文堂、二〇〇六年、所収)の中で、田辺のバックボーンとして、古典の教養と、もう一つ自らの戦争体験を指摘している(一八八ページ)。まさに卓見であると思う。